文学研究科

英語英文学専攻

英米文学、英語学・言語学、英語教育学・応用言語学研究の最先端へ

詳しい情報はコチラ!

専攻の紹介

英米文学、英語学・言語学、英語教育学・応用言語学の３つの領域について学べる体制をとっています。英米文学については、中世・ルネサンス文学、近・現代詩、近・現代小説、批評理論、英語学・言語学については、言語理論、音韻論、統語論、英語教育学・応用言語学については、第二言語習得理論及び異文化間コミュニケーション研究に、優れたスタッフを擁しています。

青山学院大学、上智大学、立教大学等の在京11の私立大学と単位互換を含む研究・教育上の提携も行っています。

修了後の進路は、前期2年の課程修了者の多くは公私立中学・高等学校の英語教員に、後期3年の課程修了者の多くは国公私立大学・高専等の教員になっています。

理念・目的

主として英米文学や英語学に関わる先端的理論を含む多様な知見の修得および厳密な原典読解を通し、独創的な研究活動の涵養を目指すとともに、教員をはじめとした専門的職業人として社会に貢献できる人材の育成に努める。

教育目標

①複数教員による指導体制を採りながら、英米文学、英語学・言語学、英語教育学・応用言語学の分野に関わる多様な研究の紹介や最新の理論の分析などを通じて、創造性豊かな専門的研究能力を育成する。
②原典の精密な読解や分析を通して、語学力および論理的分析力や構想力を涵養する。
③オリジナリティー溢れる研究成果の積極的発表の奨励など、専門的研究分野への学問的貢献を促す。
④英米文学、英語学・言語学、英語教育学・応用言語学に関わる専門教育等において、地域社会への貢献を果たしうる人材を育成する。
⑤国際的コミュニケーション能力を備え、グローバルな場で活躍しうる人材を育成する。

大学院生からのコメント

英語英文学専攻
博士後期課程１年

丹野（たんの）　海晴（かいせい）さん

大学院は、各学問領域に応じて自ら課題を見出し、探求する場です。研究は地道で孤独な営為であり、時には思うように進まないこともありますが、不安に思うことはありません。東北学院大学大学院では、先生方をはじめとして、多くのスタッフが学生生活、そして研究生活を手助けしてくださいます。

英語英文学専攻では、各々の専門分野の授業とは別に、研究の手法や心構え、学会での研究発表の仕方、論文の執筆方法など、研究の基礎となる授業が開講されています。また、長期休暇の際には他大学の先生方をお招きし、様々な分野の集中講義を受講することもできます。大学院ならではの少人数制の授業では、教員、大学院生を問わず、活発な議論が行なわれます。その他にも、大学院生が自主的に行なう読書会や、他大学との合同研究発表会などの機会を刺戟として、論文の執筆ができるのです。

大学院生には、専用の合同研究室が与えられています。英語英文学専攻合同研究室には、各個人専用のデスクと書棚があり、研究に集中できる設備が整っています。行き詰ったときは研究室の仲間と語らうのも良いでしょう。そこから思わぬヒントが得られるかもしれません。

様々な研究テーマを持つ先生方や大学院生とともに学ぶことができるこの環境で、私たちは日々、研究を重ねています！

大学院生からのコメント

英語英文学専攻
博士前期課程２年

千葉（ちば）　輝（ひかる）さん

私は理論言語学の中の統語論という分野を専攻しています。生成文法理論では統語部門は意味を決定する部門と音韻的諸特性を決定する部門に対して出力される文の階層的構造を構築していると仮定されています。英語のデータを中心に観察し、その背後にある抽象的構造に関して仮説を立て、考察するという科学的手法で研究を進めています。大学院の授業は学部までの授業とは異なり、少人数で行われ、教員と受講者間の議論が中心になります。本専攻には私の専門である統語論以外にも音韻論や形態論などの他の分野を専門にされている先生方がいらっしゃるので、言語学一般に関して幅広く学ぶことができます。研究の成果を発表する機会にも恵まれており、本学も加盟する大学院英文学専攻課程協議会主催の研究発表会で他大学の院生や先生方に自らの研究に関して口頭発表を行ったり、本専攻が発行する機関誌に論文を掲載することもできます。学会に出席する際には国内外を問わず旅費の補助も出ます。また、研究だけでなく、ティーチングアシスタントとして学部の授業のお手伝いをすることも院生の大事な仕事の一つです。修了後、教壇に立つ際にはきっとこの経験が役立つことになるでしょう。本学は院生をサポートするための環境が整っています。本学で学び、ご自身の研究を深めていただければと思います。

研究領域／研究分野

英米文学領域

- ●詩 分 野：Chaucer, Spenser, Shakespeare, Metaphysical Poets (Donne, Herbert, Marvell), Milton, Romanticism (Coleridge, Wordsworth, Keats, Shelley, Blake), Yeats, Ted Hughes, American Poets (Dickinson, Plath) など
- ●演劇分野：Shakespeare, Marlowe, Ben Jonson, Baumont & Fletcher, Wilder など
- ●小説分野：Aphra Behn, Defoe, Swift, Fielding, Richardson, Sterne, Jane Austen, Dickens, Hardy, Joyce, William Golding, Kazuo Ishiguro, Melville, Hawthorne, Dreiser, Faulkner, Hemingway, Fitzgerald, Salinger, Alice Walker など
- ●研究方法：Deconstruction, New Historicism, Narratology, Postcolonialism, Feminism, Psychoanalytic Criticism, Reader-Response など

英語学・言語学領域

生成文法理論に基づく英語の統語構造および音韻構造の諸特性、さらには、その史的変遷の特徴づけの研究。個々の具体的トピックは、その時々の理論的枠組みによって異なるので、一つひとつ列挙することはできませんが、どのような現象・理論的問題でも研究対象として設定することができます。

英語教育学・応用言語学領域

英語教育について科学的に研究を深める英語教育学及びことばに関わる諸研究分野を統合しながら言語の応用的側面について研究する応用言語学を専門領域として学ぶことができます。第二言語習得、異文化間コミュニケーションについても高度な専門的研究ができます。

担当教員・研究テーマ

■初期近代イギリス演劇 石橋 敬太郎
イスラム演劇

■現代イギリス小説 植松 靖夫
歴史・社会・思想を主軸として19世紀以降のイギリス小説の研究

■17世紀イギリス演劇 福士 航
演劇における「他者」の表象

■英語学・言語学 大石 正幸
言語理論

■英語学・言語学 大沼 仁美
音韻論

■英語学・言語学 豊島 孝之
言語理論・形態論・統語論・意味論

■英語学・言語学 那須川 訓也
音韻論・形態論

■英語学・言語学 バックレイ フィリップ
音韻論・音韻史

■英語教育学・応用言語学 村野井 仁
第二言語習得研究。特にフォーカス・オン・フォームが第二言語認知プロセスに及ぼす効果について

■英語教育学 吉村 富美子
英文のリーディングとライティングの教育

文学研究科

ヨーロッパ文化史専攻

キリスト教を基盤としたヨーロッパの歴史的な展開を研究

詳しい情報はコチラ!

専攻の紹介

本専攻は、研究者養成とともに、教員、公務員など社会の多方面で活躍し得る高度の専門的知識・能力を有する人材の養成を目的として、1997（平成９）年４月に修士課程(定員５名)が、1999（平成11）年４月には博士後期課程（定員２名）が順次開設されました。本専攻は、昼夜開講制をとっており働きながら学べるよう、社会人にも配慮しています。これまで大学教員はじめ多くの人材を世に送り出してきました。

本専攻は、古代地中海世界から近現代世界にいたるヨーロッパの歴史的な形成・発展をキリスト教思想の歴史的形成・展開との諸関係において解明しようとするところに大きな特色があります。

両者の関係は極めて複雑であり、高度な専門研究をもってはじめて追求できるものです。西洋史領域においては、中世ヨーロッパ、近世ヨーロッパ、近現代ヨーロッパまでグローバルな世界史研究を可能としています。他方、キリスト教史領域においても国家や社会を支えたキリスト教の教義や思想の発展、キリスト教美術史など、古代から現代まで時代に即した研究を可能としています。

理念・目的

きめ細かな少人数教育によって、キリスト教を基盤とするヨーロッパ文化を歴史的に考究し高度の専門的知識を修得することを基本理念とし、これによって、グローバル化した現代世界について的確な判断と能力を持った人材を養成する。

教育目標

①複数教員による指導体制のもと、一次史料に基づいたヨーロッパの文化と歴史に関する学際的な研究方法と知識を修得させる。
②演習・論文指導等を通じて、主体的に独創的な問題設定と問題解決能力を向上させる。
③研究成果を国内外の学会や学術誌に発表することを促し、グローバルな研究意識を高める。
④グローバル・スタンダードの教養を身につけさせ、多様な分野で活躍できる専門的職業人を育成する。

教員からのメッセージ

ヨーロッパ文化史専攻主任

川島（かわしま）　堅二（けんじ）教授

本専攻は、西洋史領域とキリスト教史領域からなり、西洋史領域では、古代ギリシア・ローマ、中世・近世・近現代ヨーロッパにアメリカを加えて、グローバルな世界史研究が、キリスト教史領域においては、ヨーロッパの文化・社会の根底にあるキリスト教の教義や思想について、古代から近現代まで、それぞれの時代に即した研究ができることが特色です。ギリシア・ローマの高度な古典文化とキリスト教の長い影響のもとに成立したヨーロッパ文化は、今なお私たちの関心を引いてやまない魅力にあふれています。今日まで残された文献資料を紐解いてみれば、そこから新たな問題が浮かび上がり、私たちを探求と発見の旅へといざなってくれることでしょう。大学院の授業は学位論文執筆のための専門的な演習が中心ですが、それだけでなくもっと一般的に現代社会の問題と切り結ぶ形でヨーロッパの歴史や思想文化史の授業も用意されています。研究する喜びを共に分かち合いましょう。

修了生からのコメント

ヨーロッパ文化史専攻
博士課程後期課程修了

原田（はらだ）　桃子（ももこ）さん
現米子工業高等専門学校講師

私は第二次世界大戦以降のイギリスの移民政策史、特に入国管理政策を研究しています。第二次世界大戦後、イギリスへ旧植民地からの移民が大量に流入しますが、あらゆる場での差別や住宅不足と重なり彼らの入国が社会問題として扱われます。この社会問題に対するイギリス政府の対応策は彼らの入国規制と社会統合という二面政策でした。このようなイギリスの政策は、国際移民に対する姿勢のあり方を考える上で非常に参考になると考えています。

大学院で研究する面白さは、様々な分野の人と交流できることだと思います。大学院では、自分の専門研究の他にも様々な分野を学ぶことができ、様々な先生方からご意見をいただく機会があります。研究室は様々な時代、地域、分野の院生と合同で使っていることから、自身の専門分野を飛び越えた意見を聞くことができ、大いに刺激になります。こうした交流を大事にしながら、さらに研究を深めていきたいと思います。

研究領域／研究分野

西洋史領域

- 中世ヨーロッパ史
- 近世ヨーロッパ史
- 近代ヨーロッパ史
- 現代ヨーロッパ史

キリスト教史領域

- 旧約聖書学
- 新約聖書学
- 初期キリスト教史
- 近・現代キリスト教の文化と思想
- キリスト教美術史

担当教員・研究テーマ

■中世ヨーロッパ史　櫻井 康人
中世ヨーロッパにおけるキリスト教と十字軍の研究

■近世ヨーロッパ史　楠　義彦
近世ヨーロッパにおける国家と社会の研究

■近代ヨーロッパ史　杵淵 文夫
近代ヨーロッパ諸国の経済と通商政策の研究

■近・現代ヨーロッパ史　渡辺 昭一
世界システムとイギリス帝国の研究

■旧約聖書学　田島　卓
旧約聖書成立史及び哲学的解釈

■新約聖書学　吉田　新
新約聖書の歴史的心理学的研究

■近・現代キリスト教の文化と思想　川島 堅二
近・現代キリスト教思想及び宗教概念の変容の研究

文学研究科

アジア文化史専攻

アジアの歴史と文化を学際的に研究

専攻の紹介

グローバル化の進む今日、アジアは注目を集めています。本専攻では、日本史・アジア史・考古学・民俗学の各分野の第一線で活躍する研究者の指導の下、地域研究を重視しつつも、学際的かつ国家や民族を超えた広い視野から、アジアの歴史と文化について学ぶことができます。中国や韓国の大学等から客員教授を招聘し、国際的な環境の中で学べる点も、魅力の一つです。

また、自らの研究課題を究めることはもちろんですが、大学博物館では、学芸研究員として、展示作成・展示解説・史料整理などの実務を経験し、実績を積むことができます。2012年度からは文部科学省「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」として本学アジア流域文化研究所が取り組む『新時代における日中韓周縁域社会の宗教文化構造研究プロジェクト』の一環として、国内だけでなく、中国や韓国、ロシア等でも、文書調査や発掘調査、民俗調査のフィールドワークの機会が設けられてきました。これらを経験することで、実践力・応用力を兼ね備えた、高度の専門的知識・能力を有する人材の育成にも力を入れています。

本専攻の修了者は、東北地方を中心に、全国の博物館学芸員や教育委員会の文化財担当職員、教員となり、広く社会で活躍しています。

理念・目的

日本とアジア各地の歴史と文化について、地域研究を重視しながら、国家や民族を越えた広い視野に立って深く思考し、学際的かつ高度な研究ができる人材を養成する。

教育目標

①複数教員による指導体制の下、日本とアジア各地の歴史と文化に関する先端的で高度な研究方法と知識を修得させながら、専門的で学際的な研究能力を養成する。
②日本とアジア各地での原典調査と実地調査の実践を促し、独創的な問題設定と独自の問題解決能力を修得させる。
③研究成果を国内外の学会や学術誌で積極的に発表することを奨励し、グローバルな研究意識を向上させる。
④歴史と文化に関する高度で専門的な教育と研究に関わる地域社会の多様な分野で活躍しうる人材を育成する。
⑤博士後期課程においては、国際的に通用しうる研究能力を涵養し、日本やアジア各地の教育や研究等で指導的役割を果たしうる専門的職業人の養成を重視する。

教員からのメッセージ

アジア文化史専攻主任
内陸アジア史

小沼（おぬま） 孝博（たかひろ） 教授

アジア文化史専攻では、先行きの見えない今の時代にも対応すべく、多様なものの見方・考え方ができ、社会的にも実践可能なカリキュラムを設けています。

まず、第１に重視したのが、一次資料と徹底的に向き合う姿勢の修得です。基礎科目として「資料論」を置いているのは、そのためです。そこから読み取れる情報がきわめて多様であることを学び、新たな発見、研究視角に結び付けてもらえればと思っています。

また、複数教員による集団指導を採用している点も挙げておきたいと思います。同じ研究対象であっても、歴史学と考古学・民俗学、また日本史と中国史では捉え方が違います。このような学際的なアドバイスは、きっとみなさんの視野を広めてくれるでしょう。

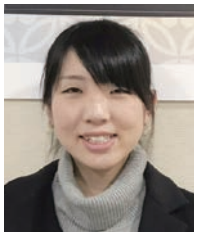
このほか、大学博物館の学芸研究員として、研究成果を社会に還元する訓練の場も設けています。

一次資料に徹底的に向き合い、そこから多角的な情報を引き出し、従来の枠組みを越えて、自らの研究を深めていく。と同時に、社会に還元する方法も身につける。みなさんも、私たちとともに、このような環境の中で、自らの研究を深めてみませんか。

大学院生からのコメント

アジア文化史専攻
博士課程後期課程３年

真柄（まがら） 侑（ゆき） さん



私の専攻は民俗学です。現在は岩手県紫波町をフィールドに、人が地域に暮らし「はたらく」ということの背景と意味について明らかにすることで、従来の学問的理解やイメージを問い直すことをテーマに研究しています。また、宮城県大崎市や仙台市での共同研究にも参加してきましたが、調査報告書の作成を通して、データの検証や、読み手を考慮した執筆の方法などに向き合えたことは、大きな糧となっています。

大学院での授業は、学部の授業よりもぐっと深く各分野の研究に触れることができます。研究室を出て、自分の身体を使って研究対象に迫る経験や、国内だけではなく中国などの国外に赴き、現地の方々と交流しながらその国の歴史や暮らしの背景を学べたことは、様々な視点からものを考えるきっかけとなりました。

さらに大学博物館においては、学芸研究員として専門的に業務に携わることができます。私自身、授業で整理した資料を展示にまとめ、図録として報告するという、授業と博物館が一体となった活動をおこなうことができました。

研究をかたちにしていく過程で得るものが大きいと日々感じます。これらをエネルギーに、研究をより深めていければと思います。

詳しい情報はコチラ！

大学博物館で所蔵資料の整理作業

研究領域／研究分野

- ●日 本 史：古代・中世・近世・近現代史
- ●アジア史：中国史、内陸アジア史、東南アジア史
- ●考 古 学：アジア考古学、日本考古学
- ●民 俗 学：日本民俗学・比較民俗学

福島県喜多方市で灰塚山古墳の発掘調査

中国・重慶市武隆博物館で資料調査

宮城県名取市で海岸林の現状を調査

大学博物館でワークショップを開催

担当教員・研究テーマ

■日本古代史 永田 英明
古代交通史、東北古代史

■日本中世史 七海 雅人
主従制、東国史など

■日本中世史・近世史 竹井 英文
中近世移行期東国史、織豊政権論、城郭史など

■日本近現代史 河西 晃祐
日本と東南アジアの国際関係史、大東亜共栄圏をめぐる諸問題

■中国古代・中世史 下倉 渉
中国の国制史・家族史・ジェンダー史・礼制史

■内陸アジア近世・近代史 小沼 孝博
新疆地域の政治と社会、遊牧民とオアシス定住民の関係

■東南アジア近世・近代史 多賀 良寛
阮朝治下ベトナムの社会経済史、フランスによるインドシナの植民地統治

■アジア考古学 佐川 正敏
アジアの先史文化、東アジアの古代都市・寺院・瓦作りの比較研究

■民俗学 政岡 伸洋
民俗の実践とその意義に関する研究、民俗概念の再検討

■環境民俗学 金子 祥之
村落社会に置ける環境史・災害史、民俗から見た生活意識研究